

平成 20 年度図書館情報学海外研修助成報告書(抜粋)

筑波大学図書館情報専門学群 4 年 安藤はるか

平成 20 年 8 月 27 日より平成 20 年 9 月 8 日にかけて、フィンランドにおいて研修させていただきました。以下ご報告いたします。

1. 研修の目的

ヘルシンキ市立図書館の取り組みの現状について、実際に現地での視察を通じサービス状況を観察し、卒業研究をより充実させることを目的とする。

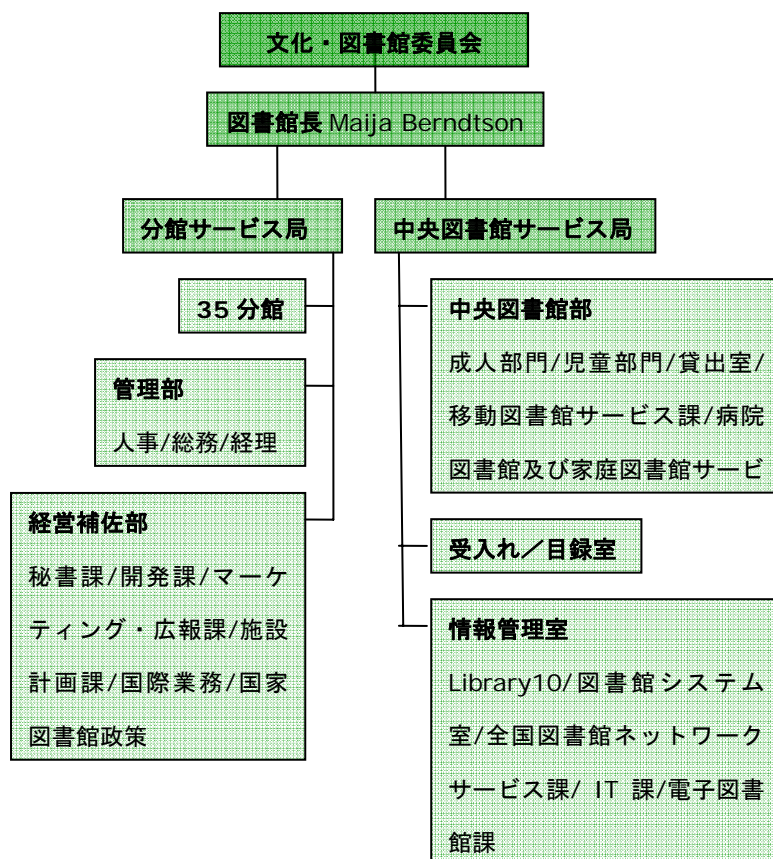
フィンランドは高い学力、ハイテク産業の世界進出、高福祉政策、男女平等社会などで知られる北欧の共和国国家である。フィンランドの公共図書館の中央館に指定されているヘルシンキ市立図書館は、2000 年にはゲイツ財団より「学習へのアクセス賞」を受賞、現在は、市内のエリアごとに特徴をもった図書館を擁し、「無限の図書館」を目指して日々業務の改善に取り組んでいる。

渡航期間中、ヘルシンキ市立図書館のほか、フィンランドの学術図書館の中央館であるヘルシンキ大学図書館、広域地域(プロヴィンス)の中央館であり、ジャンル別の配架を採用しているトゥルク中央図書館を訪れた。

2. 研修結果報告

組織

ヘルシンキ市立図書館は、フィンランドの公共図書館の中央図書館に指定されており、その中央図書館である Pasila は全公共図書館の中央図書館である。フィンランドでは公共/学術図書館ははっきりと区別され、学術図書館の中心間はヘルシンキ大学がその役を担っている。これら公共図書館は教育省、文化・図書館委員会が管轄し、図書館法によってその業務が規定されている。



進む自動化と図書館という建物の意味

字数が限られているので、ここでは特に印象的だったことを紹介しようと思う。一つはオートメーション化が進んでいること。フィンランドの多くの図書館では既に貸出・返却手続きの自動化が導入されており、ヘルシンキ市立図書館も、それぞれの分館が順に休館、改装に入っている。2006年に大規模な改装を行った Pasila では、自動化に伴い、大きなカウンターが撤去され、個人サイズのデスクが導入された。このデスク 4 つには常時 Librarian が座り、利用者に対応する。

返却は画面の指示に従って本を穴の中に入れ、ベルトコンベアに載せると自動的にバーコードが読み取られ、分類番号別に壁の後ろにあるコンテナに選別されるというものだ。また、貸出はカードと PIN コード(カード取得時に与えられる)を用いてバーコードを自分で読み取る。

こうしたハード面の改革は、予算が問題になるが、ヘルシンキ市立図書館では、進む図書館のハイブリッド化に応じて、システム管理に時間と人的投資をする必要が生じており、こうして利用者自身で簡単にできる手続きは自分でやってもらうということが必要不可欠になっているといえる。これは、フィンランドの社会では一般的に受け入れられやすい考え方で、実際に貸出/返却手続きは約 60%の利用率を誇っている。

2点目は、図書館という施設の居心地のよさだ。フィンランドは税率が高いのでその分、公共施設に投入し、市民に還元しようという意識があるといわれており、また優れたデザインを多く生んだ国だけあって、建築や家具などに配慮がなされていた。



(写真は上から Pasila, Itäkeskus, Itäkeskus, Vailla)

謝辞

今回、本助成を受け、多くの実感と体験を得て帰国しました。このような機会を持てましたこと、橘会の皆様には厚く御礼申し上げます。また、温かく見守ってくださり、アドバイスを下さった筑波大学図書館情報メディア研究科の先生方、本当にありがとうございました。